

傲慢ヒーロー ～太陽の個性を持つ少年～

ANES

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「我がプロヒーローになれない…？誰が決めた？決めるのは…我だ。」

これは、“太陽”の個性を授かった少年がライバルと切磋琢磨してプロヒーローを目指す物語だ。

目次

入学編

その男、傲慢につき	1
”太陽”の力	8
浮き彫りの課題	15
V S 半分野郎	22
迫り来る悪意	29
コンテニュー	35
V S 敵連合	42

入学編

その男、傲慢につき

事の始まりは中国軽慶市

”発光する赤児”が生まれたというニュースだった！

以降各地で「超常」は発見され

原因も判然としないまま時は流れる

いつしか「超常」は「日常」になった「架空」は「現実」に!!

世界総人口の約八割が何らかの”特異体質”である

超人社会となった現在！

混乱渦巻く世の中で！

かつて誰もが空想し憧れた

一つの職業が脚光を浴びていた!!?

—————

「太陽！起きなさい！遅刻するわよ！」

小さなマンションの一室に、甲高い母さんの声が響き渡る。

「ふあ、ふあーい。」

枕に顔を埋めながら、僕は今出せる精一杯の声で返事した。

「何寝ぼけてんの！はい、ちゃっちゃと準備する！今日が本番でしょ！」

少し焦りの色が混じった母さんの声が、僕の意識を現実世界へ呼び戻す。

「え!?本番?何の?」

「何言ってるの！今日でしょ！雄英の入学試験！」

「…………… そうだったー!!母さん！急いでご飯の準備お願い！」

「もう…………… とっくにできてるわよ。まったく、何時まで寝てたと思ってるのよ……………」

僕は勢い良く飛び起きると、そのまま部屋を出て勢い階段をかけ下りる。

しかし、勢い余って1段目を踏み外した事に気付いた時には、もう

遅かった。

ガッ！ドッ！ドドドドド！ガンッ！

「痛ててて… 当日に転ぶなんてついてないなあ。」

それを見た母は頭を抱える。

「この子つたら… 本当にこんなんで大丈夫なのかしら…」

母さんの大きなため息が後ろから聞こえた気がした。

—————

僕の名前は早乙女太陽^{さおとめたいよう}。

見ての通りドジで間拔けな性格だ。おまけに臆病で、気も弱い。身長は大体170前後、大きくもなく小さくもない。

顔は、美人の母さんのお陰で「早乙女君って、顔のパーツは整ってるよね。」と中学の頃、隣の席になった女子に何度か言われた事を覚えているけど、自分ではそんなこと全然思っなくて、むしろ特徴がないのが逆に悩みでもある。

強いて言えば髪の色素が生まれつき薄くて、金髪よりの茶髪に見える事くらいで… まあ、そのせいで不良に見られて変な人たちに絡まれる事もあったりして…

今は母さんと2人で暮らしてる。父さんは僕が幼い頃に殉職した。立派なヒーローだった。

あまりにも急な出来事で、当時の自分はすぐ理解する事はできなくて、何度も母さんに「父さんはいつ帰ってくるの？」なんて聞いた事を覚えてる。でも僕は、ボロボロになりながらみんなの為に戦う父さんの姿が本当にかっこよく見えた。そんな父さんが大好きだった。

相手の敵の素性は未だに掴めておらず、まだどこかで何かしてるのかと思うと、悔しくてたまらなかった。僕は父さんの仇を討つためにプロヒーローを志し始めた。

僕がその目標を叶えるために、まず真っ先に思い浮かべたのがヒーロー科最難関と呼ばれる”雄英高校”だ。オールマイトをはじめ、トップヒーローはみんな雄英出身だ。

僕が最初に雄英を目指す、なんて言った時は母さん含め周りのみんなに止められたけど僕の気持ちは伝わって、今ではみんなが応援して

くれている。

雄英についた太陽は目の前にある校舎を見上げた。

「う、うわー……でかい……。さすが雄英だ。」

いざ、校舎の前に立つとブルツと体が震えた。それは緊張か、はたまた武者震いか。

【雄英高等学校 入学試験会場】

そう書かれた看板が立てかけられた校門をくぐる。一步一步を噛み締しめるように歩いた。

(僕だって……この日の為に頑張ってきたんだ……！)

血の滲むようなトレーニングや夜遅くまで勉強する自分の姿を思い出す。あれだけやったんだ……！と自分に言い聞かせ、太陽は校舎へと進んだ。

指定された席に座る事数十分。ボイスヒーロー”プレゼントマイク”が実技試験の説明を始めた。

プレゼントマイクの説明によると、試験内容は10分間の模擬市街地演習で演習場にはポイントの異なる三種のヴィランが多数配置されていて、ポイントを稼ごうらしい。もう一種類いるらしいけどそれはOpなのであまり考えないようにしよう。

「俺からは以上だ！最後にリスナーへ、我が校校訓をプレゼントしよう。かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った！「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!!」

”Plus Ultra”!それでは皆いい受難を!!
体が痺れた。僕の受験は今始まった!!!

「ひ、広い……!」

最初に出た言葉はそれだった。

連れていかれた先には、本当の街とさほど変わらない模擬市街地が広がっていた。

そして周りには太陽と同じ受験者と見られる少年少女数十人が、今

か今かとスタートの合図を待っている。

太陽は大きく深く深呼吸した。そして両手で頬を叩いた。

バチン!!

「よし、行くぞー!」

その時だった。

ドンツ!

誰かの体が太陽にぶつかった。驚いた衝撃で太陽は床に尻をつく。

「い、いて!……. じゃなくてごめんなさ…….」

太陽が言葉が詰まるのも無理はない。

顔を上げると、太陽にぶつかったであろうツンツン髪の少年が特徴

的である赤目の三白眼で太陽の事を睨んでいたからだ。そして、その

少年は太陽に向かって、怒鳴り散らす。

「ああ?なんだてめえ!よそ見してんじやねえよカス!そんな体幹で

雄英受かると思ってたんのか!思い出作りなら家に帰れやクソが!」

「す、すみません…….」

あまりの迫力に、完全に萎縮した太陽を他所にその少年はスタスタ

と歩いて行った。

その光景を見た周りの受験者からケラケラと笑い声が聞こえてく

る。

「ハイ!スタート!!」

え?今なんて……. ?スタート……. ?

「どうしたあ!実戦じゃカウントなんざねえんだよ!走れ走れ!賽は

投げられてんぞお!」

その瞬間周りの受験者が一斉に市街地に走り出した。体を起こし

て、太陽は少し遅れて急いで後を追いかける。

大丈夫だ……. 大丈夫だ……. , この日のためにやってきた事を思い出

せ!いざとなったら……. 個性を!いや……. あれはダメだ!自分の

力だけで!

そう自分に言い聞かせた刹那、横から轟音が鳴り響いた。

「ガッシャーッ!!ビビ!標的補足!」

「……. 来た!これが仮想敵!想像以上に速い!」

仮想敵が太陽を襲う。

太陽は建物の影を上手く利用し、なんとか仮想敵の後ろに回り込んだ。

そして右腕を大きく振りかぶると渾身の力で拳を振るった。が、ガンツ！という音と共に、鈍い痛みが体に伝わる。

「ヒイイイ！痛い！とても素手じゃ殴れない！」

鉄でできているのか、太陽の拳では傷一つつけられなかった。

「こんなの、一体どうすれば……」

すると横からものすごい勢いで何かが近づいてくる。

「どけ！クソナードが！」

BOOOOM!!!

爆音と砂煙と共に、先ほどの少年が手のひらからの爆破らしき個性で敵を破壊した。

あまりの迫力に息を呑む。

「これが……プロヒーローの卵の実力…… やっぱりどうせ僕じゃ……」

「アデュー！あと4分20秒ー！」

嘘だろ……！まだ……Opなのに……！

「今日のために……頑張ってきたんだ……！ここまで来て……！こんな所で、終わりたいくない……！」

太陽は焦りながらも、中心部へと駆け出した。

—————

モニターで様子を見ている教師達

「この入試は敵の総数も配置も伝えていない。」

「限られた時間と広大な敷地……そこからあぶり出されるのさ」

「状況をいち早く把握するための情報力、遅れて登場じゃ話にならない機動力、どんな状況でも冷静でいられる判断力、そして純然たる戦闘力……」

「市井の平和を守るための基礎能力がP数という形でね。」

「今年はなかなか豊作じゃないか？」

「いやーまだわからんよ」

「真価が問われるのは…これからさー！」

まだ残っている敵を必死に探しながら、太陽はある異変に気付く。何やら周りが騒がしい。辺りを見渡すと、何人かの受験者がこちらに向かって走ってくる。まるで、何かから逃げるかのように。

「こつちにはもう敵はいないのに…どうして…？」

遠くに視線を移すと、その瞬間太陽は言葉を失った。

高さおよそ20mはあるであろう巨大な機械がこちらへ向かってくる。

ガシヤヤヤヤン!!ゴゴゴゴゴゴツ!!

「おい…、なんだよあれ…、あれが、Opの、もう一種類の敵…？」

あんなの構ってたら本当に1pも…」

そう言つて背を向けようとした時だった。巨大敵が進む足元に人影が見えたのは。そこには、黄色の髪の少年が両親指を立てて「ウエーイ」と言いながらウロウロしている。

騒音と、敵の迫力で自分以外は誰もその少年に気付いてはいなかった。

「な、なんで逃げないんだ！ほっとくか！いや、だめだ！あのままじゃ危ない！でもどうすれば…個性を…！」

太陽は考えた。限られた時間で最大限に頭を回転させて。

ふと過去を思い出した。周りに倒れている友達の姿。割れた窓。粉々の机。だが、ここは教室ではない。ヒーローになるための試験会場だ。

太陽は意を決した。そして胸に手を当て目を閉じる。

そして小さく呟く。

「母さん…ごめん…」

その瞬間、太陽の体からものすごい熱と光が放たれる。

その数秒後、光が収まるとそこには、

先程の太陽とは別人の言つても良いだろう。

すべてを見下したような目つきと、以前の太陽からは考えられない

ほどの急激に発達した筋肉を持ち、異質と言えるほどのオーラを放った男がその場に立っていた。そして体からはありえないほどの熱を発していた。

周りの受験者が声を掛ける。

「お、おいお前大丈夫か？急に光って…それで…」

その問いに、太陽と思しき人物は指の節をパキパキと鳴らしながら、ゆっくりと答える。

「問題ない。何故ならこれが、偉大なる我が個性」

”サンシャイン太陽”

”太陽”の力

これは、約5年前の事だ。

8月くらいだっただろうか。その日は稀に見るほどの猛暑日で、ギリギリと光る太陽が校舎を照らしていた。

教室での昼休み。

ふと、母さんに駄目と言われていたのに、なぜか個性を発動してしまった事があった。好奇心だろうか。はたまた反抗期か。そしてここからの記憶はない。

僕が目を覚ました時、目を疑った。

なぜなら、友達が血を流して倒れていたから。女の子が泣いていたから。窓が割れていたから。目の前の机が粉々だったから。理由はいろいろあったと思う。

だけど、何より驚いたのは自分の拳を見た時だ。

僕の拳はガラス片でできた切り傷や返り血がいっぱいいていた。それを見た時、この惨状は僕がやったんだと理解した。

その後、回復系の個性を持つ先生のおかげで、死人や重傷者が出なかった事が幸いだったが、僕は校長先生を含めこっぴどく怒られた。そして母にはもつと怒られた。

その日家に帰ると、母さんに大事な話があると言われた。

いつになく真剣な顔だった事を覚えている。

僕の個性についてだった。

僕の個性は太陽サンシャインと言うらしい。日の出と共に身体機能及び運動能力が向上し、正午にピークを迎える個性だそうだ。

母さんの話によれば、今まで言っていないただで幼稚園の頃、つまり個性が発現してまもない頃に同じような事があったらしい。

その時は、なんとか個性持ちの先生何人かで抑えられたらしい。

あいにくの所、僕は個性を使うと記憶が無くなってしまいうらしい。病院の先生の話によると、まだ力の方が大きすぎて理性が抑えられないから暴走すると言っていた。

しかし、この騒動のおかげで母さんが僕に個性を使つてはいけな

「あ、危ない！上だ！」

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

時すでに遅く、ものすごい爆音と共に太陽に向かってその腕は振り下ろされた。そして、その場からものすごい砂煙が舞う。

「あ、あの子、金髪の子を助けるために、自分の事を身代わりにするなんて・・・ん？え？ええええええええええ！」

その光景を見ていた受験者全員が目を見張った。

砂煙の奥には人影。そして、その真上には巨大な影。

砂煙が晴れてようやく影の正体がはつきりした。

潰れたと思ったその少年は、片腕で超巨大敵が振り下ろした腕を止めていた。そして、もう片方の腕でゴミでも払うかの様に敵の腕を薙ぎ払う。

「機械風情が・・・誰に向かって拳を振り下ろしてるんだ・・・？」

そして太陽は、軽く膝を曲げた、かと思うと爆風と共に太陽の姿はそこで消えた。

受験者は太陽の姿を探す。一人の受験者が叫んだ。

「・・・っ！上だ！みんな上を見ろ！」

受験者が一斉に顔を上げると、視線の先には超巨大敵の眼前で、左腕を引く太陽の姿があった。物凄い速さで、空中にジャンプしたのだ。

”メリットは一切ない”

”だからこそ色濃く浮かび上がる時がある”

そして、太陽は軽く引いた腕を超巨大敵に向かって振り下ろした。

「戦う相手を間違えたな。デカブツ。」

ドオオオオオオオン!!!ボガアアアン!!!

”自己犠牲の精神ってやつが!!?”

超巨大敵の体は大きく吹き飛ぶ。そして、激しい音と共に勢い良く爆発した。地面が揺れる。大気が震える。受験者は皆、度肝を抜かれた。

「おおおおおおお！」

一斉に辺りが湧く。それ程までに、現実離れた動きだった。

太陽は、数十mの高さからスタツと地面に着地する。

「……………!?体が……………持たないか……………」

その瞬間、ガクツと膝が崩れたと思うとそのまま意識を失い倒れ込んだ。

早乙女 太陽 得点 現在OP

会場がどよめく…

「一体なんだったんだ…、あいつは。」

「急に別人みたいになったと思ったら、あのデカイのぶっ飛ばしやがった……………」

「始まる前は肩ぶつかったただけでへこへこしてたじゃねえか…演技だったのか……………」

「でもあの子なんでか焦ってた…ポイントあんまり取れてないんじゃない…?」

「まあ、とりあえず……………ぶっ飛んでる奴だっつのは間違いねえよ」

～一週間後～

試験当日の事を振り返る。

目を覚ました僕の前には、知らない天井があった。

どうやら試験の最中に僕が倒れた所を、誰かが保健室に運んでくれたらしい。怪我はなかったみたいで、目を覚ますとすぐに返された。歩いてる途中に知らない人からたくさん褒められたけど、全く覚えてなかった。

(僕は何をしたのだろうか……………金髪の子を助けようとした所から、上手く思い出せない……………)

後々話を聞いた所、僕は本っ当にありえない話だけど、なんでもあの超巨大敵をぶっ飛ばしたららしい。

真下にいたあの子は助かったのだろうか。全く覚えていない。おそらく個性を発動してしまったのだろう。

家に帰った後、母さんにこの話をするところっぴどく怒られるかと思ったら、怪我はしていない事、誰かを助けたい事、でもOpだった事、その話を聞いた母さんはものすごく褒めてくれた。

そして最後に「太陽の為なら、どこの学校でも応援するわ!」と言ってくれた。

お母さんが言うのも無理はない。筆記は自己採点で合格ラインだったけどそれを帳消しにする、圧倒的Opだからだ。

雄英に受かるっていう目標は途絶えたけど、でも僕は、正しいと思う事をしたんだよ……

その時だった。

「太陽!郵便きてるわよ!雄英からみたいだけ……?」
ビクッ!

「ああなんだ母さんか……ビククリしたよ……」

「シヤキツとしなさい!雄英受けただけでも凄いことよ!」

母さんから封筒を受け取る。もちろん差出人は雄英高校。

落ちるとわかっていて、受け取るのは勇気が必要だった。

けれど、これを受け取らないと前に進めないと思った。

僕は意を決して通知を受け取る。僕は自室にこもると、大きく深呼吸

吸して封を開けた。

すると、中に入っていた小型の機械に目が止まる。スイッチを押すと

信じられない人物の映像が映し出された。

「私が投影された!!?」

この人……まさか……

「オールマイト!」

映し出されたのはNo.1ヒーローオールマイト。ヒーローを志す者、僕を含めてみんなの憧れだ。

「これを見ている君……!驚いているだろう……!実は春から雄英高校に勤めることになってね!」

「本当に!? ああ…; 受けたかったな… オールマイトの授業…」
悔しい気持ちが溢れ出す。

「早乙女少年! 君、すごいね! あのパンチ! モニターで見てたよ! 物凄いいパワーだった! 私にも劣らないほどね!」

「あのオールマイトが…; 僕の事を…!」

それだけでうれしく泣きそうだった。

「それに… ええ? なんだい巻きで!? 彼にももつと話したいことが… わかったよ!」

「筆記は取れていても合格ラインだ…; しかし、実技は0 p… 残念だけど当然不合格だ。」

わかってたけど… 悔しいっ…! 涙が溢れそうになった。これ以上聞くのが辛かった。

映像のオールマイトは話を続ける。

「それだけならね! 私もまたエンターテイナー!! こちらのVTRをどうぞ!」

そう言つて映し出されたのは、超巨大敵に立ちはだかる大柄の少年。そしてその少年は真下にいるあの少年を助けるというVTRだった。

「ああ…; なんだ、結局僕は助けられずにこの人が代わりに助けられたのか…」

「先の入試!! 見ていたのは敵Pにあらず!!」

「人助けした人間を排斥しちまうヒーロー科など、あつてたまるかつて話だよ!!?」

「きれい事? 上等さ!!? 命を賭してきれい事実践するお仕事だ!!?」

「救助活動P!!? しかも審査制!!? 我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力!!?」

《早乙女 太陽70p》

ええええええええええええ!!!

「なんで!? なんで!? 僕なんかやっつけたっけ!」

「合格だつてさ。おめでどう! 早乙女少年! 雄英が君のヒーローアカデミアだ!!? あ、あとちなみに覚えてないらしいから言っておくけ

浮き彫りの課題

「実技総合成績出ました。」

教師陣がモニターを見ながら成績順位を見ている。

1 爆豪勝己

「救助P0で1位とはなあ！後半他が鈍っていく中派手な個性で寄せ付け、迎撃し続けた。タフネスの賜物だ。」

8 緑谷出久

「対照的に敵P0で7位。アレに立ち向かったのは過去にもいたけど・・・ブっ飛ばしちやっただのは久しく見てないね・・・」

それぞれの生徒を分析する中で、教師達の視線は一人の少年の名前に集中した。

4 早乙女太陽

「救助P70・・・。この子は一体何なんだ？前半はおどおどするだけだったが残り数分での変わりようと言ったら・・・」

「えっと・・・この個性は・・・サンシャイン太陽？一体どんな個性だ。只の身体強化系とは一線を画している。一撃の威力はオールマイイト以上じゃないか？」

「爆豪・・・緑谷・・・それに早乙女か・・・面白くなりそうだ。」

く春く

「太陽！初日から忘れ物してない？」

「うん！大丈夫！ありがとう母さん！いつてきます！」

胸が高鳴る。母を背に、僕は足取り軽く玄関を出る。

それは・・・高校生活の始まり！

毎年300を超える倍率の正体

一般入試定員36名18人ずつでなんと2クラスしかない

僕は、玄関に張り出されたクラス割りを確認し、期待と不安を胸に長い長い廊下を歩く。

「えっとーAは・・・ここだ！・・・ってドアでか!!」

デカすぎる扉の前で太陽は祈った。そう、あの三白眼の怖い人と同

じクラスじゃありませんように、と。

「ガラララララ」

太陽はドアを開けるなり真っ先に血の気が引いていくのが感じた。薄い金髪に、赤目の三白眼。まさか……まさか……！

間違いない、あの時の少年だ。

ふと、目が合う。

すると立て続けに少年のスイッチが入る。

「おいコラなんだてめえ！睨んでんじゃねえよ！」

「い、いやごめん！睨んでたわけじゃ……」

（あれ？バレてない？ここは慎重に……慎重に……）

太陽は、カバンでさり気なく顔を隠そうとした時だった。

「あれ？なーんかお前見たことあると思ったらあん時の！実技前に転んでたクソナードか！てめーみたいなのが受かるなんてなんで？まさか……裏口か？」

（ヒイイイ！バレた！！落ち着け……落ち着け……言い返すんだ……！）

「いや、その僕は実力で……！」

そう言いかけた時、横から威勢のいい声が響いた。

「君！口が悪いぞ！そもそも誇り高き雄英が、裏口入学なんてものを承諾すると思うか！合格したのは本人が頑張ったからだ！それと君もだ！そうじゃないならはつきり言う！そんなんじゃプロになってから大変だぞ！」

七三分けとメガネが特徴的な少年は、割り込むなり太陽に説教をした。

「は、はい……ごめんなさい……」

僕は開幕早々沈みきった気持ちで座席に着く。

「それと君！机に足を乗せるな……」

先程の二人がまた何か揉めていたようだが、沈みきった僕の耳には入らなかった。

僕が深呼吸をして、心を落ち着かせようとした時だった。

前の席の少年が勢い良く振り返る。

「俺の名前は切島鋭児郎！結田付^{むすたふ}中学出身だ！これからよろしくな！
そんでおめえは……」

ツンツン頭の赤髪にギザ歯が特徴的な少年の、あまりの勢いに一瞬
怯むも太陽は元気良く返した。

「ぼ、僕は早乙女太陽！私立山宮^{さんくう}中学出身！こ、こちらこそよろしく！
え、鋭児郎君！」

「太陽……か。熱い……熱いぜお前……！男らしい名前だ！よろし
くな！早乙女！」

とても緊張していたけれど…… 鋭児郎君のお陰で緊張の紐はすご
く解けた気がした。

周りのみんなとの自己紹介を一旦済ませた。

驚いたのは、僕が助けたという金髪の少年も同じクラスだったの
だ。

席は2つ前で、名前は上鳴電気君。物凄く感謝されて、覚えていな
いけれどとても嬉しい気持ちになった。

名前で呼ばれるのは、カツコよくないから嫌みみたいで、上鳴君つて
呼ぶことにした。

その後、担任の相澤先生の自己紹介があった。なんとプロヒーロー
らしい。

(雄英は先生全員がプロヒーローなのか……？)

そして自己紹介が終わった直後、「早速だが、体操服着てグラウンド
に出ろ」と言われ、今現在僕たちはグラウンドにいる。

「個性把握テスト。ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、
握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈それを個性を使ってやっ
てみる」

ということで例の三白眼の少年、確か名前は爆豪…… 勝己君が個性
を使ってソフトボール投げをした。死ねえ！という掛け声と爆発音
にはとても驚いたけどそれより、705.2mという大記録が信じら
れなかった。

(個性を使えば……こんなにも違うのか……でも僕の個性は……！)
「なんだこれ！すげえ面白そう！」

その言葉聞いた相澤先生は、ピクリと反応すると吐き捨てるように言った。

「面白そう……か。」

「ヒーローになるための3年間……そんな腹づもりで過ごす気であるのかい？よし、トータル成績最下位は見込みなしの判断し、除籍処分としよう」

(ええええええええええ！まだ初日なのに！それに僕は個性のコントロールすら……)

「生徒の如何は先生の自由。ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ。」
相澤先生は不敵にニヤリと笑った。その言葉を聞いてクラスのみんなも焦りだす。

「最下位の除籍って……！入学初日ですよ？いや、初日じゃなくても理不尽すぎる!!？」

「そういう覆していくのがヒーロー。Plus Ultraさ。全力で乗り越えて来い。さて、デモンストレーションは終わり。こっからが本番だ。」

そして地獄のテストは始まった。

僕が個性を使うかどうか迷っている間に、気がつくやうに残りの種目は握力のみとなってしまった。不安の色が隠せない。

(やばいやばい、本当にやばい！どうする！考えろ！)

すべての種目で平均以上の数値は出した。けれどみんなは最低一種目は大記録を叩き出している。

(このままじゃ僕が……)

不安が脳裏をよぎる。

(せつかく合格したのに初日でなんて……)

太陽の番が回ってくる。しかし太陽は一向に投げようとしないうるすると見兼ねた相澤先生が口を開いた。

「早乙女。お前さつきから個性を使うかどうか迷っているんだろ。生憎お前の事情は俺も聞いている。だからだ、今回だけは個性を使わな

い事を認めるもう一回言うぞ、今回だ・け・だ。いいか。わかったな。」
……っ!!!

太陽が感じたのは個性を使わなくて良いという”安堵”ではない。個性を使わない事を許された、という”悔しき”だった。

自分だけ何か特別扱いされているようで、既にもうみんなと差がついてしまっているようだ。

個性をコントロールできない自分への怒りも入り混じって、心の底から悔しい気持ちでいっぱいだった。

「んじやパパッと結果発表」

「あつちなみに除籍はウソな」

そう言っただけでニヤリとしながら先生は言った。

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽。あ、あと早乙女。話あるからちよつと来い。」

順位はもちろん最下位。不甲斐なすぎすぎて自分で自分を殴りたくなった。切島君が励ましてくれたけど、僕の自分に対する失望感は変わらなかった。

――職員室――

重い足取りでドアを開ける。

「せ、先生……あの……話って……」

「お前の個性……についてだが、試験の後校長先生から話は聞いている。一時的な増強型で使うと記憶が無くなるんだろ？」

(全然違うんですけどね……まあいいか……)

「それを事情を踏まえて除籍にできなかった。まあお前みたいな理由がなくて個性を使っていなかったらとしたら当然除籍にしたけどな。」

先生は薄気味悪く笑う。まるで敵だ。

突如、先生の顔付きが変わる。

「だけど、それも今回までだ。いつまでも個性の反動を理由に使われないなんて許されないからな。先ず、個性のコントロールがお前の当面の目標だ。わかったら行け。話は以上だ。」

「はい……失礼しました。」

決定的な壁にぶち当たってしまった。

しかしこれは、プロヒーローになるためにいずれは通らなければいけないと思っていた。

僕は職員室を後にする。

(落ち込んだけど、先生の言葉には納得がいった。このままじゃ駄目だ。これからは個性のコントロールができるように成長していかなくちや…！)

〜初日終了〜下校時間〜

すつかり空は夕暮れだ。今日は色々な事がありすぎてもうクタクタ。

僕が一人でとぼとぼ歩いていると、弾けるような声が僕の耳に響く。

「あれ!? たしか君… 太陽君… だっけ?」

女の子だ。ショートカットと笑顔が印象的なこの子は確か…

「えつと… お茶子… ちゃん?」

隣を見ると、同じクラスの出久君と天哉君もお揃いだ。

「早乙女君! ちゃんと話すのは初めてだね! 僕、緑谷出久! よろしくね! 一人なら僕たちと一緒に帰らない?」

「本当に!? 勿論だよ!!」

心が弾む。登校初日に友達と下校なんて…

「ちよつと! 早乙女君! 僕を忘れてないか? 僕の名前は飯田天哉! 立派なヒーローを目指している! 朝は一方的に怒鳴ってしまい申し訳ない! これからは同じ勉学に励む者同士仲良くしてくれ!」

「こ、こちらこそよろしく。天哉君。」

母さん、こんな僕だけど、なんとかやっつけていけそうです!

—————

〜次の日〜

午前の座学を受け終えた僕達が、ずっと待ちわびていたもの…

それは”ヒーロー基礎学”!!?

そわそわした僕達の耳に、聞き馴染みのある声が遠くから聞こえ

る。その声は徐々に近くなって、僕達のクラスのドアを開けた。

「わーたーしーがー!!?普通にドアから来た!!?」

そう、合格通知通り、春から雄英で先生をしているオールマイトの授業が受けられる。

(TV越しから見えていたあのオールマイトを肉眼で……!それも授業してもらえるなんて、合格出来て本当に良かった!!)

「早速だが、今日はコレ!!?戦闘訓練!!?」

クラスが一斉にざわつく。

(きた!戦闘訓練!!これが一番楽しみだったんだ!)

「そしてそいつに伴ってこちら!!?入学前に送ってもらった「個性届」と「要望」に沿ってあつらえた戦闘服!!?着替えたら順次グラウンドβに集合だ!」

「「はーい!!?」」

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!!?」

「自覚するのだ!!?今日から自分は……ヒーローなんだと!!?」

「さあ!!?始めようか!!?有精卵ども!!?」

V S 半分野郎

《被服控除》・入学前に「個性届」と「身体情報」を提出すると学校専属のサポート会社がコスチュームを用意してくれる素敵システム！「要望」を添付することで便利で最新鋭のコスチュームが入る。

〜約3週間前〜

一枚の紙の前に、太陽は頭を悩ませる。

「もう！太陽だったらいつまでそうしてるの！もう3時間はそうしてるわよ！いい加減。パッパッと決めちゃいなさい！」

「ええ……でも母さん？ヒーローコスチュームだよ！僕が将来プロヒーローになったら、高校時代のコスチュームとしても、テレビに映るかもしれないし……ここはちゃんと考えなきゃ！まあ……プロになれたらだけど……」

自分で話を広げといて、自分で落ち込む太陽の姿を見て、母は深くため息をついたのは言うまでもない。

「要望かあ……まずは伸縮性が良い素材で……それと武器なんかも欲しいなあ……それに僕の個性は体から熱を発するらしいから、その熱を吸収するようなすごい武器をできればお願いします、と。あと……とりあえず、かつこよくしてください、と。」

〜現在〜

「始めようか！有精卵共!!？戦闘訓練のお時間だ!!？」

オールマイトの声が、グラウンドβに高らかに響き渡る。

「ムムツ！まだ何人が来てないようだが……」

オールマイトが辺りを見渡すと、太陽は3mはあろう斧を他の男子生徒数人と運んでいた。おそらくコスチュームと一緒に頼んだ武器だろう。

「おーい君達！授業始まってるぞー!!」

「はあ……はあ……ずびばせん……はあ……」

すでにクタクタになっている太陽は返事をした。

「でもマジで重いぜこの斧！数人がかりでやつとだ！だけどよお！斧っていかにも漢って感じで憧れるよな！つか早乙女、そんなヒョロイのにこんなん振れんのか!？」

「はあ…… あ、ありがとう鋭児郎君。たぶん要望に沿って作ってくれたからだと思うよ。そ、それにしてもお、重すぎるよこの武器。持つだけで精一杯で振ることなんてとてもとても…… しかも柄が短すぎて片手用じゃないか！しっかり要望に書いておくんだった！こんなのオールマイトでも振れるかどうか……」

斧を一旦壁に立てかけると、太陽は辺りをキョロキョロと見回した。

「えっーと出久君は、どこかな……ん、たぶんあれだ!」

太陽はエメラルドグリーンを基調としたオールマイトのような二本の触角が生えたコスチュームに話しかける。

「出久君…… だよね？その頭って、オールマイトを意識してるの？超かっこいいよ!」

「早乙女君!？そうだよ！ありがとう！でも早乙女君も似合ってるよ！本当のヒーローみたいだ!」

僕のコスチュームは、いたってシンプルだ。

黒を基調とした上下に、白の手袋と膝当てそして、膝下まである特製の白ブーツは、ピッタリと足にフィットする特別仕様だ。激しい動きでも脱げないらしい。おまけに、オレンジ色のマントを羽織っている。少し恥ずかしいけど、ヒーローっぽいからOKだ。

「あと…… さつきから気になってたんだけど、後ろにあるのは……斧?」

出久君の視線が、僕の後方にある斧へと映る。

「ああ…… あれね。一応…… 斧。でも重すぎるから、戦う時は置いていくよ。」

僕達は一旦話をやめて、オールマイトから戦闘訓練の内容を聞く。

まとめると、2対2の屋内戦でヒーロー組と敵組に分かれるらしい。ヒーロー組は敵組が隠す核兵器を捕まえれば勝ち、敵組は、ヒーロー組を捕まえるか核兵器を守れば勝ちだという。建物は5階建て

だ。核兵器は最上階の5階に配置されてある。

「コンビ及び対戦相手はくじだ!」

次々とペアが決まる。

そんなこんなで僕は、おしろましろお尾白猿夫君とペアになった。Iコンビだ。

「猿夫君よろしく!今日は頑張ろう!」

「よろしく。それと、呼びづらいと思うから俺の事は尾白でいいよ。」

そんなこんなで自己紹介を終えた所で、最初の試合が始まった。

みんな浮かれ気分でのこの試験を受けようとしていたけど、それは最初の組み合わせによってかき消された。

初戦は、出久君とお茶子ちゃんのAコンビと勝己君と天哉君のDコンビだった。出久君と勝己君は幼馴染らしいんだけど……どうも仲が悪いらしくて……演習中も何か熱が入ったように言い合っていた。途中、勝己君が籠手の爆撃で建物を破壊するパニックがあつたけど、出久の奇策で激戦の末ヒーロー組のAコンビが勝利した。次はいよいよ僕達の番だ。

場所を移して行われた2試合目、対戦相手は推薦入学者の轟焦凍君と障子目蔵君のBコンビと僕と尾白君のIコンビの試合だ。僕たちが敵、焦凍君達がヒーローだ。

「屋内対人戦闘訓練開始!!?」

どこからともなく開始のゴングが鳴る。

太陽は、開始と同時に階段をかけ降り、3階についた所で態勢を整える。

(ふう……始まった!一体どこから来る!核は尾白君に任せた!僕の役割は二人の無力化……でも僕に出来るのか……?いや、やるしかない!相澤先生に言われた通り、ここで個性の練習も……)

と思いかけた所だった。太陽はある異変に気付く。

「空気が冷たくなって……; つ……!これはまずい!」

時すでに遅く、急速に冷えた冷気は地面を這うように凍らせる。辺りを見渡すが、あまりにも広範囲の冷却に逃げ場など無く、為すすべ

なく僕の足首は完全に地面に固定されてしまった。

「これは…… 氷？てことは、これは焦凍君の！くそっ！やられた！」
焦凍君の個性は《半冷半燃》。右で凍らし左で燃やす。範囲も温度も未知数だ。

するとタン、タン、タンと誰かが階段を上って来る音が聞こえる。そしてゆっくりと目の前のドアが開くと、左半身を氷に横したコスチュームを纏った轟君が現れた。

その顔からは、喜びも楽しさも何一つ感じられない。

「……………！」

「動いてもいいけど…… 足の皮剥がれちゃ満足に戦えねえぞ」

（いやだ…… 嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!せつかくの戦闘訓練…… こんな所で終わりたくない…… !でも僕にはどうする事も!）

「ここが3階で核がねえとなると、尾白と核は5階か?まあ、凍って動けねえだろうがな。」

轟はそう吐き捨てて一歩また一歩と、太陽の方に近づいてくる。

（負けたく…… ない!こ…… んな…… ところで…… !僕は…… まだ…… 何も!）

悔しがる太陽には見向きもせず、すれ違い様に一言。

「悪かったな。レベルが違いすぎた。」

その時、太陽の中で何かが切れる音がした。

「負けてたまるかああああ!!!」

その瞬間、入試でも見せたまばゆい光と熱が太陽から放たれる。その熱は、冷えた空気を熱気に変えた。

轟が目を開けると、太陽の居た場所にはまるで別人の大柄な男がそびえ立っていた。

顔は太陽と同じ…… だがどこか自信に満ち溢れ、普段からは想像すらできないゴミを見るような目。伸縮性の良いコスチュームがはち切れんばかりの肥大化した筋肉。そしてなにより全身を包むオーラが先程とは別次元である事を意味していた。

「お、おい早乙女のやつ、なんか様子おかしくねーか!」

「これが試験で見せた個性というやつか。」

「先生！これ止めた方が！」

（くそっ！教師として止めるべきだ．．止めるべきだが．．これは早乙女少年にとって必要な事！）

一筋の汗を垂らしながら轟は聞いた。

「それが．．．それがお前の個性か、早乙女。いや、お前は本当に早乙女なのか？」

「口を慎め。轟。」

口調が．．変わった．．？

「お前ごときが気安く俺の名前を呼ぶな。俺は全世界の頂点に立つ者、早乙女太陽様だ。」

その言葉を聞いて轟は鼻で笑う。

「フツ、頭でもおかしくなったか？何言っただか知らねーが、少しかり体格が良くなっただけで、この状況が変わったとでも思ってるんじゃないだろうな？」

轟がそういうのも無理はない。轟の個性はいわば特殊故非常に強力。一対一という状況を鑑みればまず負ける要素などない。ただ、相手がこの男でなければ、の話だが。

「轟。お前は先程俺に言ったな。レベルが違いすぎた、と。それはこちらの台詞だ。」

太陽は軽く笑みを浮かべながら、自分の胸をトントンと叩いて挑発した。

轟は、この一言に苛立ちを覚えるのと同時に、あまりの自信に少しの畏怖の気持ちを抱いた。

「調子に乗りやがって．．．後悔してもしらねえぞ．．．最大出力だ！」

その気持ちを振り払うため、授業である事を忘れ全力をぶつける。轟は右手を太陽に向かって広げるそしてその瞬間、巨大な氷塊が太陽を襲った。

「．．．！」

ドゴオオオオオオン!!？

氷塊により建物が半壊する。物凄い振動と砂煙が辺り一帯を包む。

「おい、これ太陽やべえんじやねえの!？」

「いくらなんでも轟やりすぎだろ!」

モニターを見る生徒の誰もが、轟の勝利を確信する中、張本人の轟だけは砂煙の中をじつと見つめていた。

「!!」

煙が晴れて轟は絶句した。轟が出した氷塊は、太陽からわずか数cmずれていた。

「なんだよ!やっぱり流石推薦入学者!ギリギリずらしてやがったんだな!」

「全くヒヤヒヤした…。もし当たっていたらどうなっていたか…」

(違う… 違う… やっぱり… これは… こいつが…)

轟はゆっくり太陽の方を見る。その顔は驚きの表情を隠せず이었다。

轟の驚きは、目の前に無傷の太陽が立っていた事ではない。

自分が見たものが、本当の出来事であったという事についての驚きだ。

「ウォーミングアップは、終わったか?早く来い。」

轟は太陽の目をジツと見る。

「早乙女…。お前…。この氷、どうやって避けた…。?俺は当てるつもりで…!」

「?おかしな事を言う奴だ。無論、ずらしただけだが?」

「!!」

轟は2度目の絶句をする。

(本当…。だったのか。氷がぶつかる瞬間、早乙女が左手で氷を弾く瞬間が一瞬見えた。見間違いだと思っただが…)

轟の焦燥など知らず、太陽はさらに煽る。

「今のは右だけだったが、次は左も使って来い。」

その瞬間、轟は一瞬だけ太陽を睨んだがすぐ心を落ち着かせて言った。

「戦闘に於いて、熱は絶対使わねえ。」

「はあ。ならばこれが今のお前の本気というわけか。正直拍子抜けだ。仕方ないクラスメイトのよしみでお前には選ばせてやろう。降参か敗北か。」

「降参も敗北も負ける事に変わりねえじゃねえか。」

「降参は自分で選べるだろう。だが敗北は俺が手を下さねばならない。まあ、加減はできんがな。」

轟は太陽の目を見てわかった。この男は本気で言っている、と。

「はあ。わかった。降参だ。」

それを見ていたオールマイト達。

「先生！あいつら試合やめちまったぜ!?どうすんだよこの場合!」

(ルールにはないが… 仕方ない!)

「ヒーローチーム… 戦意喪失により! 敵チームwiiiiiiin!!
?」

「ふう… どうやら終わったよう… くっ!!?」

その瞬間以前と同様、太陽は膝を崩しそのまま気を失った。

迫り来る悪意

「おい・・・これじゃあまるでさつきと同じじゃねえか・・・」

「負けた方がほぼ無傷で・・・勝った方が倒れてら・・・」

数分後・・・

「さあーて！講評の時間だ！」

「先生！その前に、早乙女は大丈夫なんスカ!? さつき急に倒れて・・・」

「心配ない！今は保健室で休んでるだけさ！」

「あ、ちなみに今回のベストは障子少年だけ！」

「何故だか・・・はい！オールマイト先生」わかる人・・・ってオイ!!
?」

オールマイトが言い終える前に八百万が元氣よく挙手した。

「轟さんの行動は相手の行動を封じ、なおかつ核には危害を加えていない点は良かったですが、中盤に出した巨大な氷塊により建物が大きく損害しました。先ほどの爆豪さんと同様の理由ですね。」

「早乙女さんはこの訓練の勝利条件に当てはまらない「降参」というルールを自分勝手に作り、本来のルールを無視していました。」

「尾白さんは最初の氷結で身動きが取れなくなり、実際何もせずここの訓練を終えました。」

「相手の状況を瞬時に把握し、仲間に伝える。対人訓練をきちんと想定していた。障子さんはその役割をきちんとこなしていました。」

「もともとなかったルールを自分勝手に作り出し、相手に勝つなど敵チームの勝ち反則のようなものですわ」

シューーーーーン・・・

(また思ってたより言われた・・・!!?)

〜数十分後〜

「緑谷少年以外は大きな怪我もなし！初めての訓練にしちや上出来だったぜ！それじゃあ私は緑谷少年と早乙女少年に講評を聞かせねば！」

そうやって、オールマイトは物凄い速さで校舎へ戻った。

チラリと後ろに目を流す。

視線の先には、俯いている爆豪と思いつめた表情をした轟が居た。
(爆豪少年… 自尊心の塊… それと轟少年… 早乙女少年との対戦中左側を使わなかったのは、何か理由があるのか… !?どちらにせよ先生としてしっかりカウンセリングせねば!!?)

~~~~~  
〜放課後〜

ひどく落ち込んだ様子で、太陽は教室へと歩みを進めていた。

(また倒れてしまった… 本当に情けない… 焦凍君は無事らしい… けど何か失礼な事は言っていないだろうか…)

そう思いながら、ゆっくりと教室のドアを開けると入り口付近でクルアスのみんなが出久君を囲むように集まっていた。

「おお!早乙女も来た!おめーもおつかれ!!大丈夫だったか!」

「うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう鋭児郎君。」

「それに早乙女!おめーも熱かったぜ!なんだよあの個性!一気にマッチョになったかと思えば、試合は急に終わらせちゃったりよ!」

「轟の氷塊は大丈夫だったのか!」

「へへ… うん… なんとか…」

怒涛の質問攻めに押しつぶされそうだったとき、ふと出久君と目があった。僕はなんとか質問を切り抜け出久君に駆け寄る。

「出久君!訓練中見てたよ!すごいカッコ良かった!」

「あ、ありがとう早乙女君。僕も見たかったよ!早乙女君の訓練!」

そうして少し喋っていると、出久君はふと何かを思い出したように教室を出ていった。

僕は辺りを見回すと焦凍君が帰り支度をしていた。

「ちよつと待って!焦凍君!」

「なんだ… 早乙女か… 体は大丈夫だったか。」

「うん、大丈夫だよ。それより訓練中、焦凍君に何か失礼な事を言っ  
なかった?言ったら本当にごめん!」

僕は深く頭を下げた。

「頭上げろよ早乙女。俺は別に何もされてねえし対人訓練で熱が入っ

て、多少口が悪くなるのも仕方ねえ。」

それを聞いた瞬間、轟の寸前まで太陽は歩み寄った。

「く、口が悪く!? 僕何か言ったの!? 本っ当にごめん!」

「早乙女。お前まさか覚えてねえのか。まあ、気にするほどでもねえよ。またな。」

そう言つて焦凍君はスタスタと歩き、教室のドアに手をかけた。そして一歩踏み出したと思うともう一度こちらを向いた。

??

「早乙女。」

「っ!... はい!」

「次は... 負けねえ。」

そう言つて焦凍君は去つて行つた。

(こんなの全然勝ちじゃない。今回の訓練でより僕の課題が浮き彫りになった。せめて、発動中の事は忘れないように...)

(そしてこの数日後 僕らは知る事になる... オールマイトの言つていた、真に賢しい敵の恐怖を...)

数日後...

オールマイトが雄英に就任したニュースを聞きつけたマスコミが、連日のように押し寄せる騒ぎが起こっている。

雄英には雄英バリアーという学生証や通行許可証を持っていない人が通るとセキュリティが働く門があるらしい。それでなんとか平静を保っている。

「昨日の戦闘訓練お疲れ Vと成績見させてもらった。爆豪、お前もうガキみたいなことするなよ」

「わかっている。」

爆豪君はふてくされた顔で返事をした。

「緑谷はまた腕ぶつ壊して一件落着か。」

「それに早乙女。お前はまた暴れて倒れて記憶なくなりました、はいおしまいか。」

ビクッ!!?

「お前らいつまでも」できないから仕方ない」じゃ通させねえぞ。それさえクリアすればやれることは多い。焦れよお前ら。」

「はい!!」

「まあ本題だ... 急で悪いが今日は君らに... 学級委員を決めてもらう」

「二」学校つばいのきたー!!?」二」

クラス全体がはしやぎ出すのも無理はない。

普通科なら雑務ばかりでやりたくないと思うけど、ここヒーロー科では、集団を導くつていうトップヒーローの素地を鍛えられる役だからほぼみんなが立候補した。

ちなみに僕はしていない。

(僕には... まだとても...)

天哉君の提案により、投票で決めるべきという案が出た。

いざ、決まるとそれはそれで迷う事もある。

(誰に投票しよう... ヤオモモさんは美人だしリーダーシップもあつて適任だけど、天哉君みたいにザ・委員長つていう感じも捨てがたい。焦凍君のクールな感じもいいし、実君みたいなマスコツト的な感じも良い...)

一体誰に投票すればいいんだああ!!?

悩んだ末、僕は出久君に投票した。勝己君が出久君の投票数にブチ切れてたのは怖かったけど、その結果出久君が委員長。ヤオモモさんが副委員長という事になった。

のだけれど... その後の昼休みにあったマスコミがバリアーを突破するという事件で機転を利かせた天哉君を見た出久君が、天哉君を委員長に指名してこの話は幕を閉じた。

〜次の日〜

この日は、相澤先生が出張で代わりに13号先生が来てくれた。

13号先生によると今日のヒーロー基礎学は、相澤先生、13号先生、オールマイトの3人で見ると予定だったそうだったが、なんでも相澤先生は急な出張で不在らしい... でもその前に... お腹が痛

い!

(今日の朝に食べたヨーグルトがいけなかったのか…!?)

冷や汗をかきながら、太陽は腹を抑える

「今日は人命救助訓練です。みなさん、コスチュームに着替えた後バスに乗り込んでください。」

(お、お腹痛いけどバスに乗り遅れちゃ迷惑かかるから… 行った先のトイレでしょう… もう少しの我慢だ…)

—————

「すつげー遊園地かよ!」

13号先生が連れてきた所はまさに遊園地のような所だった。

「あらゆる事故や災害を想定して僕が作った演習場… その名も… ウソのU 災害やS 事故ルームJ !!?」

(早く… ! 漏れそうです! 13号先生!)

「あれ? 先生、その前にオールマイト先生は?」

「オールマイト先生は諸事情で遅れてくるそうです。」

その後13号先生から個性についての説明があった… がお腹がすでに天元突破しそうな僕には全く内容が入ってこない。

(ごめんなさい… 13号先生! もう限界です!)

「先生ちよつとトイレに行ってください!」

僕は目を血走らせながら伝え、そして猛スピードでトイレに駆け込む。

「そ、そんなに我慢してたんですね。 気を取り直して、それじゃあまずは…」

太陽を見送り、13号が仕切りなおそうとしたその時だった。

ゾワツ!!??!!??!!??!!??

その瞬間、その場にいた全員が恐ろしいほどの寒気が襲われた。一斉に中央を見ると、何も無いところから何やら黒いモヤが発生し、不気味な男が顔を出す。

その瞬間13号が大きな声で叫んだ。

「みんな！ひとかたまりになって動かないで！」

最初に出てきた男を筆頭にゾロゾロと、こちら側に入ってくる。

「なんだありや！入試ん時みたいなもの始まってんぞパターン？」

「動かないで!!あれは……敵です!!？」

13号の一言で生徒に凄まじいほどの緊張が走る。

《緑谷side》

《奇しくも……命を救える訓練時間に僕らの前に現れた》

《プロが何と戦っているのか 何と向き合っているのか》

「どこだよ……せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ……オー  
ルマイト……平和の象徴がないなんてさ……」

《それは……途方も無い「悪意」》

真ん中の男がこちらを見て不敵な笑みを浮かべこちらを見る。

「子どもを殺せば来るのかなあ？」

く現在の太陽く

トイレの便座に座りながら。太陽は己との戦いに興じていた。

「なんとか……間に合った……けどこれは長い戦いになりそう  
だ……早く授業に戻りたいのに……!!?!!?……グギユルルル  
！」

どうなる？波乱の救助訓練!?

## コンテニユール

《平和の 象徴を 殺せ》

突如現れた敵を見るなり、13号は大きな声でとつさに叫んだ。

「委員長！今すぐ学校まで駆けてこの事を伝えてください！」

飯田がビクリと反応する。

「しかし！クラスのみんなを置いて行くなど…」

「飯田!!? いいから走れって!!?」

「くそう!!?」

歯を食いしばり、一瞬戸惑いの色を見せた飯田だが、意を決して出口に向かって走り出した。

その様子を見て、八百万が咄嗟に声を出す。

「13号先生！わざわざ飯田さんに行かせずとも、なんらかの方法で連絡を取れば良かったのでは…」

そこまで言った所で轟が横から口を出した。

「現れたのはここだけか学校全体か… 何にせよセンサーが反応しねえなら、向こうにそういうことが出来る”個性”がいるってことだ。だから、恐らくは電波も妨害されて学校に連絡は取れねえ。だから13号は飯田を真っ先に行かせたんだろ。」

轟は淡々と説明を続ける。

「校舎と離れた隔離空間。そこに少人数が入る時間割… バカだがアホじゃねえ。これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ」

「… ツー」

その説明を聞いた八百万は悔しそうに下唇を噛みしめた。

「あの敵達は私が相手をします。みんなはひとかたまりになって、その場から離れないように!!?」

一人で向かおうとする13号の背後から麗日が慌てて声を出す。

「でも!!? 先生は救助活動が主なヒーロー… 戦闘経験はあまりないんじゃない…」

それを聞いた13号はゆっくりと振り返り、

「麗日さん。一芸だけじゃ、ヒーローは務まりませんよ!」

そう言い残し、敵の元へと飛び降りる。

「バカだぜあのヒーロー。戦闘向きじゃねえ癖にこの数相手にやり合うだ?笑わせてくれる!」

敵の中央に立った13号に向かって周りの敵が一斉に襲いかかる。

「敵の真ん中に来るとは大マヌケが!」

しかし、その瞬間13号に襲いかかった敵がその場から姿を消した。

「…ッ!」

周りの敵がざわつき始める。

「僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込みチリにする個性。吸い込まれる覚悟がある人だけかかってきて下さい。」

「多対一でも全くハンデを感じさせない立ち回り…。どんなものでも吸い込める個性…。そして吸い込まれたら死という恐怖で行動すら鈍らせる…。なるほど…。」

「嫌だなプロヒーロー。有象無象じゃ歯が立たない。」

真ん中のリーダー格だと思われる男がイラつきながら首をガリガリと掻き巻く。

その姿を見ていた生徒達。

その時だった。

《緑谷 side》

ものすごい悪寒と共に、走り出す飯田君の向かう先に何もない所から敵側の個性と思われる黒いモヤが現れたのは。

「っ!!っ!」

そのモヤは徐々に形を成していき、みるみる人の形へと変わっていく。すると突如そのモヤから暗く重い声が響いてくる。

「させませんよ。初めまして我々は敵連合。せんえつながら…。この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは…。」

「平和の象徴、オールマイトに…。」

「息絶えて頂きたいと思つての事でした。」

は？

みんなに混乱が生まれる。そんな事は気にせず目の前の敵は淡々と話を続ける。

「本来ならばここにオールマイトがいらっしゃるはず……ですが何か変更があつたのでしょうか？まあ、それとは関係なく……私の役目はこれ。」

敵がそこまで言った時、両脇をものすごい速度で何かが通過したかと思えば、目の前にかつちゃんやんと切島くんが飛び出した。すでにエンジン全開の二人が、その勢いのまま敵に迎撃を食らわせる。

Booom!

SKLIT!!?

「その前に俺たちにやられることは、考えてなかつたか!？」

「おいクソメガネ!!?ここは任せて、テメエは今のうちにきつきと行きやがれ!」

「っ!!?言葉遣いは気に入らないが恩に切る!!?」

飯田君は敵の怯んだその隙に物凄い速さで出口へと消えて行つた。

「しまった……逃してしまった……早く報告をしなければ……」  
ゾワツ!!?!!?

「危ない危ない……そう、生徒とはいえど優秀な金の卵」

(かつちゃん達の攻撃が……聞いてないのか……?)

《散らして…… 罫り…… 殺す。》

その瞬間、僕らの視界は黒いモヤで閉ざされた。

雄英高校 仮眠室

「んー……13号くん繋がらない……」

13号が電話に出ず、オールマイトは困っていた。



「いかなる理由であれ勤務時間外の都合で教鞭を放り出す…とても愚かしい事をしていた。終わりがけに行って何を語れよう？ 後10分程なら体ももつだろうし…」

「私が行く！」

血を吹きながら、そう決意した所で目の前のドアが開いた。

「待ちなよ！」

「校長先生!？」

「yes! ネズミなのか犬なのか熊なのか、隠してその正体は——校長さ！」

真つ白な毛並みにスーツを着こなしたこのネズミのような生き物こそが雄英高校の校長だ。

オールマイトが目線を合わせるために低く屈む。

「本日も大変整った毛並みでいらっしやる！」

「秘ケツはケラチンさ！ 人間にこの色艶は出せやしないのさ！ その話は後にして…」

突如、放送が乱れる。

「ザザッ…！ 先生方、大至急職員室にお集まりください！ もう一度繰り返します。大至急職員室にお集まりください！ USJに敵が襲撃してきました！」

「!!」

《USJ side》

13号が襲いかかってくる敵を次々とブラックホールで吸い込んで行く。徐々に数が減り、奥にいるリーダー格の男と目があった。

「はあ、はあ、あれが… この敵達の親玉… アイツを倒せば…」  
連戦に次ぐ連戦で疲れを隠せない13号は、少しずつ動きが鈍くなつていく。ふと目線を下に下げた時だった。

顔を上げると、先程いた場所にリーダー格の男がいない事に気づく。

(あの男は… 一体どこに… !!?)

その時だった。背後から悪寒とともに首に違和感を感じた。

「がはっつ……！！？」

後ろを振り返るとリーダー格の男が首の根元をしつかりと掴んでいた。

「分かりづらいけど……ブラックホールを出す間にタイムラグがある。そしてその間隔は段々と長くなってる。」

敵のトップに掴まれた部分からボロボロと崩れ落ちていく。

「無理をするなよ。13号。」

「……ッ！」

(コスチュームが……崩れた！)

「その個性じゃ長期決戦は向いてくないか？それでも真正面から飛び込んできたのは生徒に安心を与えるためか？ところでヒーロー。」

「！！？」

13号は正面に気配を感じ、顔を前に戻すと、時すでに遅く大きな手が自分の視界を遮り頭を潰されるのを確かに感じた。

「本命は俺じゃない。」

《緑谷side》

峰田君と蛙吹さんのおかげで敵との戦闘、初勝利を手にした僕達は、少し強くなった気でいた。プロヒーローだから大丈夫だろうと、どこかで安心してた。プロの世界。敵。僕らはまだ何も見えちゃいなかったんだ。

「対 平和の象徴 改人 ”脳無”」

そう呼ばれる化け物は、13号の助けに来た僕らの心を軽々とへし折った。僕らの眼前にはボロボロになって下敷きになった13号とその上にまたがる異形な怪物。

な、なんだあいつは……まるで化け物じゃないか……！

(はあ……はあ……上手く……息が吸えない……！)

「死柄木 弔」

そう呼ばれたりリーダー格の男の横に、黒霧と呼ばれる先程の黒いモヤの男が現れる。

飯田君を逃した件について、話していたようだけど上手く聞き取れなかった。

「プロヒーロー何十人も相手じゃ敵わない…… ああ…… ゲームオーバーだ……」

(ゲームオーバー……？何の話だ?)

その横で、脳無が倒れた13号の頭を持ち上げ、地面に叩きつける。バキバキという音とともに、13号の意識はさらに薄れる。

「脳無が13号を潰している間に、少しでも平和の象徴として矜持を潰しておこう……」

ブワツ!!?

風が収まり、目を開けると目の前では死柄木弔が、蛙吹さんの頭を掴む寸前だった。

(やばいやばいやばいやばいやばい逃げて！逃げて蛙吹さん!!?)

「脳無」

S M A A A A A S H !!? !!?

渾身のパンチで、起きた砂埃が収まると目の前には13号の側にいたはずの脳無が受け止めており、なおかつダメージはさほどないようだった。

(速っ……ていうか……効いてない……?)

「まあいいや……まずはお前から!!?」

(僕が覚悟を決めたその時だった。入り口をブチ破る爆音と、希望の声が聞こえたのは。)

「私 came!」

「あー……コンテニューだ」

《太陽 side in トイレ》

「ふう……長く険しい戦いだっただよ……これですつきり!」

ドゴオオオオオオオオン!!?

「わわっ!すごい振動……勝己君またぶつ放しちやったのかな……?」

でもさつきから何回もなってるような……早く戻らないと……授業終わっちゃう……！」

太陽は全速力で場内に戻った。(50m走11秒台)

《太陽side》

「授業終わっちゃう終わっちゃう……え？」

驚くのも無理はない。

太陽の目の前には穴の空いた天井、視界を遮るほどの砂煙、そしてボロボロになったオールマイト。そして明らかに敵対する勢力。

(ここは雄英で……、ヒーロー科最難関で……、プロヒーローがたくさんいて……オールマイトはNo.1ヒーローで……それなのに……それなのに……)

「何でこんな所に敵が!!?」

死柄木の聳る速度が徐々に早くなる。

ガリガリガリガリガリ

「衰えた？嘘だろ……このチートが……うおおおおお!!」

「死柄木弔……落ち着いてください……ダメージは確実に表れている。私と連携すればまだやれるチャンスはあるかと……それに……」

「そうだな黒霧……それに脳無は……」

もう一体いる。」

## V S 敵連合

死柄木と黒霧を前にしてオールマイトは口を開いた。

「どうした？ 来ないのかな？ クリアとかなんとか言ってたが…… 出来るものならしてみろよ!!？」

(なんだって……？ もう一体いるだと……？ ふぎけるなよ！ 一体倒すだけで精一杯…… ぶっちゃけもう一歩でも動けばこの姿は維持できん！ なんとか、子供たちだけでも……！)

「黒霧…… 出せ……」

「わかりました……」

その言葉と共に、黒いモヤから先ほどと同様のタイプの脳無が姿を現した。

「おい、これって結構やばい状況なんじゃねーの？ 流石のオールマイトでも……」

いくら平和の象徴がいたと言えど、脳無の脅威を先程の脳無で嫌と言うほど味わった生徒達には、否が応でも不安がよぎる。

「やれ……！ 脳無…… 平和の象徴を殺せ……！」

緑谷は脳をフル回転させて考える。

(あれは虚勢……！ オールマイトは限界だ！ 他の先生達は…… 今どこに?! いや、間に合わない……！ 今できる最善を……！)

脳無がオールマイトの前に立ちはだかり拳を上げる。いち早くそれに気づいた緑谷は、スタートを切る。

!!

(速い!!)

死柄木が視線を横に写すと、先ほどまで離れた場所に居た緑谷が、脳無に飛びかかりあと一歩という所まで迫っていた。

「オールマイトから…… 離れろ！」

「黒霧!!？」

死柄木の一言で、黒霧が緑谷の前に立ち塞がる。

「二度目はありませんよー！」

黒霧のモヤが緑谷の体を包み込む。完全に動きを封じられた緑谷

はなす術なく周りを見渡す。

「くそっ！離せ！」

(かっちゃん達は……！駄目だ！遠い！先生達はまだ来ないのか……？これじゃ……オールマイトが……！)

緑谷の心配虚しく、脳無の重い拳がオールマイトの体へとめり込む。

「ガハッ!!」

ドオオオオオオオン!!??!!?

「「オールマイトオオオ!!??!!?」」

物凄い勢いで吹き飛ばされたオールマイトは、血を吐きながらもなんとか受け身を取り意識だけは残っていた。

(僕の所からしか見えないけれど……土埃にまぎれて……体が半分変身しかかっている……!!?)

吹き飛ばされたオールマイトを見て、死柄木はこの上ない笑顔を浮かべる。

「無様だなあ……オールマイト……平和の象徴とも呼ばれたお前が……今やなす術なく眺めるだけ……そこで見てろ……お前が守れなかった子供たちが……殺される瞬間を……！」

「やめろ……敵……共……子供たちには手を出すな……ゴホッ!!?ゴホッ!!?」

「まずはお前からだ……」

死柄木は緑谷に向かって指を指す。

「さっきのスピード……オールマイトじみた何かを感じた……ヒーローの芽は……今の内から詰んでおく……！」

平和の象徴として、ヒーロー社会のトップに立ち続けたオールマイトが立ってない姿は、爆豪を始めとする1-A生徒の足を竦ませた。

「やれ！脳無！」

黒霧に動きを封じられた緑谷に脳無の拳が襲いかかる。

「やめろおおおおお!!?」

オールマイトの叫び虚しく、緑谷に拳がぶつかる……

その時だった。

ブオオオオオン!!?ガシツ!!?

爆風と共に、脳無の拳が止まる。いや正確には止められた。敵達ですら予想できなかったのだ……

「お前達……愚かでかつ運がない……」

!?

「わざわざ死ぬためにこんな、辺鄙な場所にやってきたのだから。」

この男の存在を。

《太陽side》

〜数分前〜

トイレから出たばかりの太陽は上手く状況を掴めないでいた。

(あれは……敵!?!いやもし本物だしたらプロヒーローが沢山いるこの学校にわざわざ来るか?目的は……それになぜこの時間に……駄目だ!わからないことが多すぎる!!?)

太陽がそうこう思っている内に、もう一体目の脳無が黒霧のモヤから姿を現した。

「なんだ……あの化け物……」

太陽は思わず冷や汗を垂らす。

(仮に……あれをオールマイトが倒せたとして、残りの敵はどうするつもりなんだ!?!いや、ボロボロのオールマイトと戦わせるあたり、あの化け物が確実にオールマイトにとどめをさせるといふ自信があると考えた方が妥当だろうか……あっ!!?)

太陽の不安通りに、脳無の拳がオールマイトを吹き飛ばす。

(なん……だよ……あの強さ……オールマイトは……No.1ヒーローだぞ……!それを……あんな簡単に……他に誰かヒーローは……)

そこまで考えて、太陽は考えるのをやめた。

(誰か… じゃない。僕だ。僕がやらなきゃ。)

太陽は唇を強く噛みしめ、意を決する。

「よ、よし！ いざとやるとなったら、なんかやれる気がしてきたぞ！」  
太陽は大きく深呼吸する。そして、

「こ、個性発動！ …… あれ？」

いくら念じても太陽の体にはピクリとも反応がない。

「なんで…！ こんな時に！」

(入学試験の時だって… 戦闘訓練の時だって！ 上手くやれてたはずなのに！ なんでこんな時に限って！)

死柄木の声がわずかだが太陽の耳に入る。

「子供たちが… 殺される瞬間を… …！」

(なんだって…？ 殺… す？)

入学してからまだ僅か、少し前まで中学生だった太陽には、死という事に対してまだそれほど身近に感じていなかった。

ヒーローとしての自覚すら芽生えていない現状で、ましてや敵に殺されるなど考えたことすらなかっただろう。

だからこそ、その一言は太陽の心を大きく動かすきっかけとなった。

「そんなこと… させない。させて… たまるか！」

(この際、僕はもうどうなってもいい。後の事は考えない！ 心配かけるけどごめんなさい母さん！ だけど僕は！ ここで頑張らないと！)

〔平和の象徴ヒーローになんて絶対になれない！〕

### 《現在》

爆風と共に現れた太陽が、緑谷に振り下ろされたと思われた拳を片手で止める。

「遅くなった… 緑谷… 今の時刻と状況は？」

太陽の姿を見て、緑谷の目から涙が溢れる。

「雰囲気は違うけど… 分かるよ… ありがとう… 太陽君！ ズビッ…」

「早くしろ」



「ご、ごめん！じ、時間？えつと… 13時30分くらいだよ！それと太陽君！助けに来てくれた所悪いけど、今すぐ逃げて！こいつはオールマイトでさえ手こずる強さ… 僕らなんかじゃ歯が立たない！」  
緑谷の焦りを気にもせず、太陽は悠々としている。

「もう… 昼を過ぎたのか… では60%くらいだな…」

（60%… ?太陽君は一体何を…）

「ん？誰だお前？もういい！やれ！脳無！お前が犠牲者第一号だ！H A H A H A H A!!」

死柄木の笑い声に太陽も笑顔で返す。

「フハハハハハ」

ドンツ!!?

「はっ…」

あまりの出来事に、緑谷を始めとする生徒は勿論のこと、敵達ですら言葉を失った。

ドンツという鈍い音の後、静寂を破ったのは死柄木のその一言だった。

その死柄木の眼前には、腕を高々と掲げる太陽と下半身のみ残された脳無の姿があった。

「おい… 待て… 黒霧… 今何が起きた…」

上手く状況を飲み込めない死柄木は黒霧に問いかける。

「すみません死柄木君… 私にも何がなんだか… 脳無が襲いかかった直後、瞬きの間に…」

「あの脳無を一撃で…」

「おい脳無！早く再生しろ！何そこで寝てる！」

その一言で脳無の体が再生し始める。

太陽は喜び混じりの声で言う。

「そうでなくては面白くない。」

「死柄木弔… おそらく今のは何かの間違いかと… オールマイトですら手こずった脳無を…」

再生した脳無が、太陽に襲いかかり激しい連打を叩き込む。

オールマイトに叩き込んだ乱撃と同様の攻撃が太陽を襲う。

ドドドドドドドドツ!!??!!?

「早乙女!」

切島の声をかき消す程の衝撃音が辺りに響き渡る。

激しい振動が収まると同時に、切島が膝から崩れ落ちる。

「なんで… 行かなかった… これじゃ… あの時から何も…」

切島の頭に過去がよぎる。

「いや… まだ終わっちゃいねえ!」

「早乙女の仇、取ってやる!もうブレねえ!たとえ俺一人でも…!必ず…!」

切島の後ろから声が聞こえる。

「待てやクソ髪。俺も殺る。さつきはビビっちゃまったが、それはさつきまでの俺だ!今の俺はさつきと違い!!?」

爆豪をきっかけに、轟以外の全員が太陽の仇を取るために名乗り出た。

「よし!土埃が晴れたらGOだ!行くぞ!」

その時だった。

「勝手に殺すな鋭児郎。俺を誰だと思っている。」

「!!?」

土埃が晴れると脳無の拳を体で受け止めながら平然とする太陽がいた。

「早乙女!おめーダメージは… それに今名前…」

「おいおいおいおい聞いてないぞ聞いてないぞ。」

死柄木は目を見開きながら、首を掻き切る。

「こいつは一体何なんだ!オールマイトですら手を焼く脳無を…!」

「はあ……. どんなものかと食らってみたが……. こんなものか……. がっかりだ。では、そろそろ終わりにするか。」

そう言うのと太陽は、左腕を引き、拳に強く力を込める。すると太陽を中心に大きく大気が揺らぎ、拳を熱源として周囲に熱気が溢れ出した。

「さようなら、ゲームオーバーです。まあ、もうコンテニユーは出来んがな。」

ドオオオオオオオオン!!?

眩い光と共に、太陽の拳が脳無を襲う。

光が収まるとすでにそこに脳無の姿は木つ端微塵に消し飛び、その代わりにもといた地面に影が焼き付いていた。

「では、次はお前たちだな。うっ!!?」

エネルギーを使い果たしたのか、プシューという空技が抜けるような音と共に、太陽の体が元の状態に戻り、そのまま倒れ込む。そしてそれと同時に、玄関から声が響く。

「IーA学級委員長!!? 飯田天哉! ただいま戻りました!」

飯田の後ろには雄英教師、もといプロヒーロー数十人が立ち並ぶ。

「ああ……. 来ちゃったな……. ゲームオーバーだ。帰って出直すか黒霧。」

死柄木は消え入る瞬間、ものすごい形相で太陽を睨む。

「オールマイトは想定以上のダメージを与えられた……. だが……. ! 覚えたぞ……. 今度は必ず殺してやる……. 早乙女……. 太陽……. !」

ズズツ!!?

その一言を最後に敵達は、完全に姿を消した。

—————

プロが相手にしているもの……. 世界。

それは……. 僕たちにはまだ早すぎる経験だった。

この襲撃はのちに起こる大事件の始まりだったんだけど  
この時の僕らには知る由もなかったんだ。

第一部 入学編 完